

令和2(2020)年度 第62回卒業式式辞

駒場東邦高等学校第62回生諸君、ご卒業おめでとうございます。

保護者ならびにご家族の皆さまにおかれましては、同時配信により式の様子をお見守りいただいておりますが、ご子息の晴れの門出にあたり、お喜びも一入のことと拝察いたします。

本日は、関係各所の皆さまのご理解をいただき、卒業生諸君が一堂に会しての卒業式を挙げる運びとなりました。新型コロナウイルス感染対策に細心の注意を払うため、例年ご参列いただいているPTA会長、邦友会々長をはじめご来賓の皆さま、また、学校法人東邦大学の理事長をはじめ各部署の長の方々、そして何より、諸君の保護者ご家族の皆さまにご参列していただけないことは、大変残念なことです。これらの皆さまは、言うまでもなく諸君の卒業を心から喜び、諸君のこれからの歩みを楽しみにしつつ注目していらっしゃいます。その祝意を共に感じながら、この大事な卒業式を進めてまいりたいと思います。

さて、先ほどは諸君の“晴れの門出”と述べましたが、果たして卒業は晴れがましいものでありましょか。

何十年か前の私自身のことを申し述べるに、悩み惑いのスパイラルを抜け出しきれなかった心残りを、さも熱く燃えたかのようなポーズで隠し、さらに、新たな道へ踏み出すことにいささかのためらいを感じながら、何とも落ち着かない気分支配されていたものです。そして、そののち時間を要することなく、内心の悔恨に気づくのでした。

諸君は、駒東生活のまさに佳境に差し掛かったところで、今般のコロナ禍に苛まれました。現在この時点で、内心の悔恨をはっきりと意識している諸君も少なくないと思います。学校として中止と判断した体育祭への思いはもちろんのこと、学習進度への不安も大きかったと思うし、受験まで残り僅かとなったところで存分に学校で過ごすことができなかつたことも悔やまれているかもしれません。自らの力で立てと言われながら、一方で、聞き分けの良さを求められる、これは学校という枠組みの限界なのでしょうか。

諸君は、入学に際して、将来に向けた無限の可能性を言祝がれ、希望に胸を焦がしたことでしょう。また、後悔することないように自分の好きなことに全力で当たれとのアドバイスに、奮い立ったことでしょう。しかし、青春とは、無限と言われたその可能性をひとつひとつ削いでいく過程であるように思います。社会生活に適應するために、好きなものすなわち捨てたくないものを、捨てなければならないときもあるのです。さすれば、選択肢の幅を狭めていくことこそ、青春の真の姿なのかもしれません。

青春には、実は暗い、悔恨に満ちたものという側面があるように感じます。

むしろ、それだからこそ、卒業に際して“晴れ”の場を設定して祝うのかもしれませんが。“晴れ”の場で語られる明るいロゴスの裏には必ず暗いパッションがあつて、しかし、それだけにひとり一人の青春は愛おしいものであると言えるのではないのでしょうか。一度しかない青春の日々において、自身の思いに誠実に向き合つて情熱を傾けた末に、たとえば適性のなさを痛いほど思い知らされたりして、絶望の淵に追いやられたりするものです。しかし、その絶望の中からもじみ出てくる温かいものがあります。それは共に学んだ学友たちの共感であり、そばで見守つたご家族の支えであることは言うまでもありません。他でもないその共感と支えによって、可能性が削がれて狭まつた選択肢を、自分の進むべき道として自ら選ぶことができいくように思います。そうやって人は、まさに掛け替えのない“ひとり”になっていくのです。

卒業式とは、少しのためらいを感じながら、“ひとり”となって巣立っていく諸君の姿を、共に過ごした者同士で確認するための儀式なのかもしれないと考えています。

本校創立者の菊地龍道先生は、第1回卒業生へ送る言葉を『人間の誠実について』と題し、その中で次のように述べています。「人間が人間として尊厳であることは、自ら省みておのれ自身に恥じない誠実心を堅持しているところにある。」続けて、この誠実心は「古来人間が良心、道徳律と呼んだもの」と同じであり、「勤勉」につながるものである

としています。

世界で起こっているあらゆる自然現象や社会現象に相對して、これと誠実に向き合うことについて考えるとき、ここで誠実であると言うのは、自分自身の動機によって動くことであり、自分自身の感受性によって捉えることであると言えるでしょう。つまり、本校が教育理念とするところの「科学的精神と自主独立の気概を養う」ということの源泉は、まさにこの「誠実心」にあるということになります。社会生活に適應するためには、どうしても一定程度の聞き分けの良さが求められるのは仕方のないことですが、それは他でもない自分の力で為されるものであるのだから、おのれ自身をごまかすことはできないと、菊地先生の言葉は教えています。さらに、おのれ自身への誠実さとは、良心や道徳心、あるいは勤勉さとなって顕れると説きます。そしてそれは、「テストの点数」や「出世」では測ることのできない価値を示すものであることを明らかにするに至ります。

このことを、先ほど述べたことと考えあわせるに、諸君にとって駒場東邦で学んだということは、その過程でどうしようもない絶望や悔恨を感じるがあったにせよ、同時に諸君一人ひとりを孤独から救い出すものであると言えるように思います。それはあくまでも自分に対して誠実に、そして勤勉に取り組むことを求めるものであるということをお忘れたくはないものです。

ところで、まもなく東日本大震災から10年の節目を迎えます。

私は最近、柳美里さんによる話題の小説『JR 上野駅公園口』を読んだのですが、そこには、主人公の「ホームレス」の死に、震災の津波や原発事故が重ねて映し出されていて、非常に印象深い作品でありました。

主人公は、もともと福島の前村から出稼ぎで東京に出てきて、日本の高度成長を支える労働に従事した人物です。彼は、長年郷里を遠く離れて働きながら必死で我が家を支え続け、それでもその行く末は、守っていたものすべてを失って孤独のうちに死を迎えるというものでした。そしてラストシーンでは、震災とそれに伴う原発事故のために郷里での生活を奪われた福島の様子が、主人公の姪の死によって象徴的に語られて、主人公が「ホーム」を失う姿と重なり合っています。ここに描かれているのは、実は都市生活を営む私たち現代人の不安をそのまま切り取ったものではないかと思いついて、私はドキッとしました。しかし同時に、それを正確に看破し洗練された筆致で描き切った著者の目は、共感の温かさを湛えたものではないかと感じたのです。

言うまでもなく、10年前の震災は、私たちの生活を支配していた“安全神話”を崩壊させ、価値観を根底から脅かすものでした。それでも何となくそのことを直視しきれないまま過ごしてきた私たちを、今度はコロナ禍が覆い尽くしているわけです。一方ではどうしようもなく停滞して、一方ではガラガラと音を立てて変化していく、アンバランスな時代であると感じます。諸君の門出に際して、このような暗い展望を殊更に語ることは大変心苦しいのですが、ここで私が言いたいのは、今日駒場東邦を巣立つ62回生諸君は、この不安定な時代にあって、世界に“一人”で立っていながら“孤独”ではない、自主独立を志しながら温かい絆を持っている、ということなのです。

「卒業」は「一定の段階を経て、そこを通り過ぎること」を表す言葉でもあり、諸君はいよいよ次の段階に行くのだから安易に振り返るべきものではないとも言えます。しかし、諸君にとって、そう簡単に失われることのない「ホーム」として、この駒場東邦があることを、心のどこかに留めておいてほしいと願っています。

最後になりましたが、ここまでご息方を慈しみ育てていらっしゃる保護者の皆さまへ、改めて心よりお祝いを申し上げますとともに、この6年間に頂戴した本校教育活動への並々ならぬご理解とご協力に、厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。62回生諸君の大いなるご活躍を、共に楽しみにしていきたいものです。

以上をもって、本日の式辞といたします。

令和3（2021）年3月6日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦